2022 年 6 月 26 日(日) ショートメッセージ「祈りの輪の中で」

H.I.

暗唱聖句: いつも、塩で味付けされた快い言葉で語りなさい。（コロサイ 4：6）

コロサイの町は、ローマ帝国、アジア州に属するフリギア地方に位置し、エーゲ海からほぼ 2000 キロメートルの内陸部に位置していました。エーゲ海に面したエフェソの町から主要な道路がユーフラテス地方へと通じ、このコロサイもその道筋に存在していました。紀元前四世紀頃は人口の多い豊かな町で、手織り手工業や染め物などが盛んであった、と伝えられています。しかし、紀元 61 年以降の文献からは姿を消しています。著者がこの手紙を書くこととなった経緯は、コロサイに起きていたシンクレティズム（違った背景を持つ宗教、哲学的立場、宗教的立場を互いに妥協させようとする宗教混交行為）による混乱の問題がおきていたからでした。間違った哲学思想や禁欲主義をキリスト教に取り込もうとしている人々に警告する形で、著者はキリスト教にとって大切なことは全てイエスの中にある、と 2 章 3 節において書かれていますように述べています。

この手紙は、エフェソの信徒への手紙・フィリピの信徒への手紙・フィレモンへの手紙と共に、通常「獄中書簡」と呼ばれています。パウロが投獄されていた場所としては、従来、使徒言行録の記事に基づいて、ローマかカイサリアが想定されてきましたが、パウロは他の場所においても何回も獄中生活を強いられたと考える方が史実に近いと考えられています（例えば、第二コリント 11 章 23 節以下を参照してみてください）。第三の有力な候補地は、エフェソです。しかしここで押さえておきたいのは、この手紙はパウロの直筆ではないとする指摘が 1938 年以降に強くなされているということです。『新共同訳新約聖書注解』（日本キリスト教団出版局）の「コロサイの信徒への手紙」についての執筆者の宇佐美公史先生も、文体や語彙や表現形式や神学的思想はパウロのものではない、と考えておられます。少なくともこの手紙は、パウロの同伴者で、パウロと深い関わりを持っていた人が共に書いたものであると思われ、テモテやエパフラス（1 章 7 節）が有力視されています。

手紙は、パウロの手紙の形式に従い、挨拶と神への感謝をもって始まります。ここで注目しておきたいのは、「信仰」と「希望」と「愛」という、初代キリスト教の教えの三対の総括語です。パウロは、共同体の基本的な生活態度を簡潔にこの三つの言葉で表現しました。次にパウロの書き方との違いについていくつかの聖書箇所から見ていきたいと思います。1 章 10 節にある「善い業」は、1 章 21 節の「悪い行い」との対比に直結しています。パウロは 3 回この「善い業」という言葉を彼の手紙で使ってはいますが（ローマの信徒への手紙 2 章 7 節、13 章 3 節、第二コリント 9 章 8 節）、「悪い行い」との対比に直結させてはいません。

1 章 14 節には、「贖い」は「罪のゆるし」であると書かれています。ここでの「罪のゆるし」は、複数形の「罪」の「ゆるし」とされていますが、パウロの真筆の手紙の中では、パウロは「罪」と言う単語をほとんど常に単数形で用いています。つまり、「罪」とはそれ以上には分割できない、つまり、複数形にすることができない、「根源的な罪」の意味で用いられているのです。しかし、「罪」という単語を使用している 59 回のうち、7 回だけ、パウロはその「罪」を複数形で用いています。そしてその場合には、その「罪」は、「複数形にすることができる律法違反の罪々」などというような、ユダヤ的な意味で、あるいは、旧約の引用の文章のなかで、用いられているのです。ところが、ここコロサイ書では、1 章 14 節においてそうでありますように、「罪のゆるし」の「罪」が複数形で用いられていて、史的パウロが持っていた、「罪」を簡単には複数形で使用しない、という緊張を孕んだ姿勢が、見られません。

1 章 19 節の「満ちあふれる」（「充満」する）という表現は、コロサイ書ではここの他に 2 章 9 節、エフェソ書で 4 回（1：10, 23, 3：19, 4：13）使用されていますが、パウロ直筆の手紙における 6 回（ロー

マの信徒への手紙 11：12,25, 13：10, 15：29、第一コリント 10：26、ガラテヤの信徒への手紙 4：4）の使い方と比較してみると、「充満」の意味内容が具体的でなく、むしろ独立的・絶対的用法となっています。これらのことを見てみましても、コロサイ書がパウロの直筆ではないと思われるという説は、有力視してもよいと思われます。

2 章 8 節では「人間の言い伝えにすぎない哲学」とあります。これは、現代のわたしたちが使う「哲学」という用語の言葉とは異なり、宗教をも含んだ広い意味を持っていました。秘密の儀礼を行う宗教や哲学の学派も、神を知り見ることを追求する限りにおいては、それと近い関係にありましたが、霊媒や魔術、霊力を持つ人も知者とか哲学者と呼ばれました。その哲学の知恵が「人間の言い伝えにすぎない」ものと言われ、かつまた「むなしいだまし事によって人をとりこにするもの」とも言われていることは注目に値します。それと反対の言葉は「真理の言葉」です。3 章 1 節～4 節では、謬説（あやまっている説）の説く「哲学」への反論がされ、同時にこれから展開されるキリストに従った具体的な生活への、励ましへの橋渡しとなっています。4 章 2 節～6 節では短い勧めの言葉で訓戒が語られています。コロサイの人々がたゆまず祈り続けること、使徒とその協力者たちの宣教が実を結ぶようにと祈ること、共同体の外の人々（ユダヤ的概念での異端者）には賢明に振る舞い、時にかなった適切な言葉を語るようにと勧めています。この時のパウロは 4 章 10 節にあるようにアリスタルコと共に投獄されています（使徒 19 章 29 節）。「塩で味付けされた快い言葉で語りなさい」とは、自分自身が神の恵みの中にいることを感謝し、どのような言葉を語るにしても必要なのは神の恵みであることを覚えていましょう、ということでしょうか。4 章 16 節からもわかりますように、この手紙が書かれた紀元後 80 年頃までにはすでに、パウロの手紙が各地の教会の間で「権威ある文書」として回付され、読まれるようになっていた事実を想定することができるでしょう。弟子たちの思想の中には、師と仰ぐパウロのあまりに急進的な思想を、多少なりとも穏健なものにしたいとの意志も窺えますが、パウロの手紙を後世まで伝えようとする強い意図があったことは疑いないでしょう。そして、この手紙はコロサイの信徒たちの抱く不安と恐れに起因する悲観的な見解に対して、キリストこそが宇宙の安定と調和の基礎であり、キリストこそ唯一の神から遣わされた仲介者であることを信じて歌い励ましています。（1 章 15 節～23 節は「賛歌」となっています。）

パウロが自分のためにも祈って欲しいと、コロサイの人たちに頼んだ時、「神がみことばのために門を開いてくださり」とありますが、わたしたちが祈る時も神さまご自身が門を開けてくださることを待ち望み、共同体である教会において共に祈り前進していきたいと思います。

最後に、バプテスト女性連合機関誌『世の光』の 2021 年 9 月号において、コロサイ書の 1 章 18 節に出てくる「キリストは教会の頭（かしら）である」という言い方は、「教会はキリストの体である」という、キリストの頭も、顔も、首も、胴体も、手も、足も、つまり御子イエスの肢体のすべてを含んでいるはずの、そしてそのことはすなわち、「私たちのすべての肢体」をも含んでいるはずの、そのようなキリストの体こそが教会なのだ、と言ってくれていることばが語られる文脈においては、安易に語られてはならないのだ、と指摘しておられることに注目して、このショートメッセージを終わりたいと思います。なぜならば、「私たちの『教会』がたくさんの問題を抱えた共同体であることを、先刻神さまはご存じでありながら、それでもなお、否、それだからこそ、『教会はキリストの体なのだ』と宣言してくださっているのだからです」。

●分かち合い

・共同体である教会と聞いてどんなことを思い出しますか？

・みなさんにとって、教会はどんなところですか？

ショートメッセージは、教会ホームページから動画でも視聴できます。
左の QR コードを読み込むか、スマホ・PC からご覧の方は**こちら**をクリックしてください。
公開：6 月 23 日（木）～